



Title	<紹介>島津忠夫著『宗祇の顔 画像の種類と変遷 島津忠夫著作集別巻』
Author(s)	丹下, 暖子
Citation	語文. 2012, 98, p. 51-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

島津忠夫著『宗祇の顔 画像の種類と変遷』

島津忠夫著作集別巻』

丹下暖子

一〇〇九年に完結した『島津忠夫著作集』全十五巻（一〇〇三年一月～一〇〇九年三月、和泉書院）の別巻として、このたび刊行された本書は、連歌師宗祇の、多く現存する画像を分類、考察し、特に像容と顔貌の変遷の由来を辿ろうとするものである。本書では、宗祇の画像を、その特徴から、「端坐の坐像（やや左向き、中啓を持つ／やや左向き、円相像／やや右向き）」「旅姿の騎馬像」「脇息に凭れる坐像（左向き／右向き）」「意図的な変形の見られる画像」「宗祇薰香図」の五種八類に分けて、丹念に考察を進めている。本書の構成も、以下に示すとおり、この分類に基づいている。

一 はじめに／二 端坐の坐像(1)／三 端坐の坐像(2)／四 端坐の坐像(3)／五 旅姿の騎馬像／六 脇息に凭れる坐像(1)／七 脇息に凭れる坐像(2)／八 意図的な変形／九 集外歌仙の歌仙絵／十 宗祇薰香図／十一 脇息に凭れる坐像の先蹤／十二 終わりに

現存する宗祇の画像で最も古いのは、「端坐の坐像（やや左向き、中啓を持つ）」に分類される、相良家旧蔵の宗祇坐像であるという。本書では、この坐像に始まり、三十八の宗祇の画像が、

その変遷を辿る形で順に取り上げられている。それぞれの画像の比較を通して、先後関係や影響関係を指摘し、さらには原本の想定などにも及ぶ。特に、宗祇の画像の中では最も多く残っているものの、室町期に遡るものはない「脇息に凭れる坐像」については、室町中期に成る、同じような像容を持つ肖柏像や三条西実隆像の影響を受けた可能性を指摘する。

本書の特徴として、取り上げる画像については、贊や像容を中心に極めて具体的に示されていること、また、多くの図版が掲載されていることが挙げられる。本書は、『島津忠夫著作集 第四卷 心敬と宗祇』（一〇〇四年五月）の「第二章 連歌師宗祇 十六 宗祇画像の変遷」を承けるものだが、『著作集』で掲載された図版が四点であったのに対し、本書では二十四点もの図版が掲載されている。これらの図版は、読者が理解を深める助けとなる。

なお、本書の「あとがき」及び「老のくりごと一八〇以後国文学談議」（和泉書院ホームページ連載第六回）によると、本書は、先に挙げた相良家旧蔵の宗祇坐像を実見できたことが一つのきっかけとなって、まとめられたとのことである。「あとがき」には、「今後もし別巻2が出ることがあれば、これは別巻1といふことにならう」とあるが、再びきっかけを得られ、本書を「別巻1」とされる日が俟たれる。

（和泉書院、一〇一一年七月、一一一頁、三九九〇円）
（たんげ・あつこ 本学特任研究員）